

## シンポジウム、ワークショップ、講演会の開催記録

## ■ 講演会

### 第 29 回講演会

講師：Elizabeth Protacio- De Castro (University of the Philippines, Diliman)

企画：杉万俊夫

日時：2004 年 5 月 11 日 13:00-14:30

場所：総合人間学部棟 1103 室

題目：社会変革とグループ・ダイナミックス

概要：内戦状態が続くフィリピンにおける NGO（非政府組織）の活動に関するアクション・リサーチについて紹介していただき、グループ・ダイナミックスが社会変革に対して、いかに貢献しうるかを議論する。

成果：約 30 名の参加を得、活発な議論が行われ、上記の目的を達成することができた。

### 第 30 回講演会

講師：高野祥子（高知心理療法研究所）

企画：岡田康伸

日時：2004 年 6 月 30 日 17:00 - 19:00

場所：文学研究科東館第 3 実習室

テーマ：「箱庭表現の変容とこころの変容過程」

概要：内的な女性像との関係性がテーマとなったと考えられるある男性クライアントの事例をとりあげ、箱庭表現が変容していくさまをつぶさに追うことで、こころの変容過程についてディスカッションすることを主眼とする。

成果：第一級の箱庭療法家である講師自身による事例提供により、大学院生レベルではなかなか経験し難いような相当深いレベルでの箱庭表現に触れることができ、心理臨床家としての訓練過程にある大学院生にとって非常に刺激的なディスカッションとなった。また、箱庭表現という臨床イメージの変容過程とクライアントのこころ（主体）の変容過程の関連性についても活発にディスカッションが行われた。参加者は約 30 名。

### 第 31 回講演会

講師：Elizabeth L. Crawford（リッチモンド大学）

企画：楠見 孝

日時：2004 年 7 月 22 日 16:00-17:30

場所：百周年時計台記念館 会議室

題目："Categorization and Bayesian adjustment strategies"

概要：This talk will present research on Bayesian adjustment strategies in spatial cognition. Space is organized into categories which are used as a source of prior information to reconstruct memories of individual locations. In contrast to most theories of the relation between language and thought, the structure of these spatial categories does not map onto the structure of linguistic spatial terms, such as "above." Both linguistic and non-linguistic spatial categories rely on the structure of the horizontal and vertical axes of symmetry, but these axes play different roles for language and spatial cognition. The rational nature of these spatial categorization schemes will be discussed.

成果：A チーム主催の講演会として実施し、学内外の研究者、大学院生が参加した。講演者は空間認知と空間言語に関する認知心理学的研究の若手の第一人者であり、1ヶ月の滞在の間、ゼミへの参加や共同実験の実施によって、研究交流を深めることができた。講演は人の空間的カテゴリー化が、その記憶、注意、言語に及ぼす影響を実験的に明らかにする手法とデータを紹介したものであり、非常に興味深いものであった。参加者は約 30 人。

### 第32回講演会

講師：Michael Bamberg（クラーク大学）

企画：やまだようこ

日時：2004年9月28日 17:30-19:00

場所：教育学部第1講義室

共催：科学研究費「フィールドの語りをとらえる質的心理学の研究法と教育法」

題目："Small stories in the lives of adolescents"

概要：In my opening comments I will introduce the concept of 'Small Stories', i.e., stories we tell in passing, in our everyday encounters with each other, in mundane and highly interactional situations; stories that usually go unnoticed - by the interlocutors as well as by the analysts. Most of these 'Small Stories' fall short of the story-goodness criteria in terms of their tellability and structural closure. However, for the purpose of 'generating identity', these 'Small Stories' serve a highly important function in interactional settings. They form the 'connective tissue' between early childhood accounts and descriptions and the (later) development of life stories and biographies. Elsewhere, I have referred to these kinds of 'Small Stories' as "the real stories of our real lives" by which we learn to fashion a self that is "narratively configured" (Bamberg, 2004). I will then go on and discuss a short video-clip of a group-discussion between five 15-year-old males and an adult moderator within which one of the participants presents a brief sequence of events that barely qualifies as a story. In this 'Small Story' a 11th-grader is characterized as 'talking a lot about his gayness', and he is further described as 'associating more with girls than with other boys'. It will become clear that a good assessment of what the story is about can only be made if we are able to take into account why the story was shared, which requires an investigation into how the story is interactionally grounded, and how it is jointly accomplished by the participants in the attempt to do 'identity work'.

成果：アンリカ・クラーク大学のマイケル・バンバーグ教授は、ナラティブ研究と質的心理学の第一人者であり、実際のVTRをもとに具体的な語り分析をWSと講演によって見せていただいた。新しいスモール・ストーリーの分析は、学問的刺激に満ちたものであった。参加者は70人。

### 第33回講演会

講師：Ian Parker（Manchester Metropolitan University）

企画：杉万俊夫

日時：2004年10月26日 18:00-19:00

場所：総合人間学部棟1103室

題目：Critical Psychology and Qualitative Psychology

概要：英国における批判心理学、質的心理学の動向を紹介していただき、日本の動向を交えて議論する。

成果：約20名の参加を得、活発な議論が行われ、上記の目的を達成することができた。

### 第34回講演会

講師：田中康裕（大正大学人間学部専任講師）

事例提供者：村林真夢（京都大学大学院教育学研究科）

企画：河合俊雄

日時：2004年11月10日 17:00-19:00

場所：京都大学文学研究科東館第3実習室

テーマ：「夢に現れた主体イメージと身体イメージ」

概要：ユング派分析家の田中康裕先生をお迎えして、臨床イメージとしての夢についての事例検討を行う。参加者からの事例提供を募り、事例の中で報告されたいくつかの夢についてディスカッションすることを主眼とする。

成果：参加者の一人が臨床事例を発表し、事例の中で扱われたクライアント・治療者双方の夢について検討を行った。事例提示の後、田中先生よりユング派の視点から夢イメージについての示唆的なコメントをいただき、さらに参加者とのディスカッションによって、夢というイメージに表現されたものを通して事例の経過を多面的に理解することが可能となった。参加者は約30名。

### 第35回講演会

講師：石井均（天理よろづ相談所病院内分泌内科部長兼栄養部長）

企画：皆藤章

日時：2004年11月23日 13:00 - 18:00

場所：京都大学文学研究科東館第3実習室

テーマ：「幼児期発症の糖尿病患者への心理的援助 - 治療関係と意味の発見 - 」

概要：近年身体病患者に対する心理的支援については各方面で関心が高まっているが、糖尿病患者に対するこの種の支援としては我が国のリーダー的存在である石井先生に、医療現場の中での最新の取り組みについて紹介していただき、同時に、心理的理解・支援についてディスカッションを行う。

成果：石井先生からは、糖尿病治療に関する講演の後、「3歳で発症した1型男性の事例について」「糖尿病であることを拒否しつつづけている1型糖尿病事例について」という二つの事例発表があった。病院内での医師による治療場面をほぼ逐語記録に近い形で聞くという貴重な発表であり、その後、医師・栄養士・当研究室教員・大学院生をまじえた事例検討では時間をかけた濃密なディスカッションが行われた。参加人数は約15名。

### 第36回講演会

講師：益田玲爾（京都大学フィールド科学教育研究センター）

企画：杉万俊夫

日時：2004年11月24日 15:00 - 17:00

場所：吉田南キャンパス総合人間学部棟 1103室

テーマ：「魚類心理学」

概要：魚類と人間の関わりを研究すべく益田氏が旗揚げした魚類心理学の構想を紹介いただくとともに、その具体的な研究例について議論する。

成果：約20名の参加を得、活発な議論が行われ、上記の目的を達成することができた。

### 第37回講演会

講師：江口重幸（東京武蔵野病院）

企画：やまだようこ、桑原知子

日時：2004年11月27日 13:00 - 15:30

場所：芝蘭会館 研修室I

テーマ：「病いの経験を聴く：臨床民族誌の視点から」

概要：病いの経験を語り、それを聴き取るという行為のうちに含まれる多様な意味や可能性を、具体的な事例をとおして検討したい。それには医療人類学や文化精神医学から取り入れられた、「病いは物語である」という視点や精神医学への文化批評という視点が含まれる。それら民族誌的視点が日常臨床においても重要な役割を果たす点を論じたい。

成果：江口先生が長年行ってこられた「病いの語り」研究の集大成というべき、密度の濃い内容のご発表をしていただいた。参加者は予約者に限ったので、120人であったが、立ち席も出る熱気であった。

### 第38回講演会

講師：秋本倫子（東京都老人医療センター）

企画：岡田康伸

日時：2004年12月4日 14:00 - 17:00

場所：京都大学文学研究科東館第3実習室

テーマ：「脳血管性痴呆症患者の箱庭療法過程」

概要：超高齢化社会をむかえた我が国において、高齢者に対する身体的な面での医療的、福祉的サポートが充実する一方で、心理的側面でのサポートの充実は、まだまだ立ち遅れているという現状がある。そうした中で、長年、高齢者に対する箱庭療法を実践されている秋本倫子先生に、脳血管性痴呆患者の箱庭療法の事例を提供していただき、高齢者の心理的ケアに果たすイメージ表現の役割についてディスカッションすることを主眼とする。

成果：講師による事例発表により、認知機能や言語機能に障害をきたすために、言語によるコミュニケーションや自己表現が不可能に近い脳血管性痴呆の患者の方々が、箱庭という非言語的で、論理性を必要としない媒体に出会うことによって、社会的な機能不全を起こしている外面からは想像もつかないような豊かな内的世界を表現しうることを目の当たりにし、痴呆症を呈してもなお豊かに残るイメージの世界と臨床的にイメージが活性化することの心理サポートとして意義について、活発な議論がなされた。参加人数は約25名。

### 第39回講演会

講師：岩宮恵子（島根大学教育学部助教授）

企画：河合俊雄

日時：2004年12月5日（日） 13:00 - 17:00

場所：芝蘭会館

テーマ：「思春期をめぐる冒険」

概要：講師の岩宮恵子先生自身が経験されたある思春期女子の離人症の臨床事例をとりあげ、解離という心理機制と関連でイメージや夢についてディスカッションすることを主眼とする。

成果：特に、事例経過の中で扱われたクライアントの夢に焦点を絞ってディスカッションを行うことを通して思春期の解離的心性および解離というメカニズムについて多面的な視点を得ることができた。参加人数は約40名。

### 第40回講演会

講師：野間俊一（京都大学医学部精神科神経科助手）

企画：河合俊雄

日時：2004年12月11日（土） 17:30 - 19:30

場所：京都大学文学研究科東館第2実習室

テーマ：「“身体”がテーマとなった時に心理臨床の場で何ができるか」

概要：臨床の場では、クライアントの「身体」についての多彩な訴えを聴くことがある一方で、「身体」を表現すること自体が難しいクライアントに出会うこともあるなど、「身体」がテーマとなる事例が多くある。今回は、提供された事例の検討を通して、臨床の場に大きく関わる「身体」、「心身症」についての考察を深める。また、「身体」が大きく扱われる医療の場で臨床を行う際に、感じられる困難や疑問を中心にディスカッションを行う。

成果：心身症の治療経験豊富な講師の野間先生より、「身体」、「症状」の捉え方についての講演をしていただき、心身症を抱えて来談する人に対して臨床家がなし得ることとは？というテーマで、心理学的、医学的な見方による意見の交流を行い、双方の見解を深めることができた。参加人数は約20名。

### 第41回講演会

講師：Justine Cassell（ノースウエスタン大学）

企画：楠見 孝

日時：2005年1月31日 10:45 - 12:00

場所：芝蘭会館 研修室I

題目："Trading Spaces: Multimodal Route-Finding and Direction-Giving by Humans and Humanoids."

要旨：Humans frequently accompany direction-giving with gestures. These gestures have been shown to

have the same underlying conceptual structure as diagrams and direction-giving language, but the puzzle is how they communicate given that their form is not codified, and may in fact differ from one person to the next. Based on results from a study on language and gesture in direction-giving, we propose a framework to analyze such gestural images into semantic units (image description features), and to link these units to morphological features (hand shape, trajectory, etc.). This feature based framework in turn allows us to implement an integrated microplanner for multimodal descriptions that derives the form of both natural language and gesture directly from communicative goals. In this way we have been able to realize an embodied conversational agent that can perform appropriate speech and novel gestures in direction-giving conversation with real humans.

成果：国際シンポジウム「New perspectives in affective science」のサテライト企画として、A チーム主催の講演会として実施し、心理学だけでなく情報学、工学分野の学内外の研究者、大学院生が参加し、会話エージェントのジェスチャーの効果についての講演とデモンストレーションに基づいて討論をおこない、今後の研究の推進において有意義であった。参加者は約 30 人。

#### 第 4 2 回講演会

講師：Zoltán Kövecses (エトヴォス大学)

企画：楠見 孝

日時：2005 年 2 月 2 日 15:30-17:00

場所：百周年時計台記念館 会議室

題目："Metaphor in culture"

要旨：メタファの文化的普遍性と特殊性について、感情などに関するメタファを例に挙げて、メタファに 3 つの水準を設定する新たな理論的枠組みについて提示した。

成果：国際シンポジウム「New perspectives in affective science」のサテライト企画として、A チーム主催の講演会として実施し、心理学だけでなく言語学分野の学内外の研究者、大学院生が参加し、メタファの理論さらに、身体や文化の問題に関する講演に基づいて、議論をおこない、今後の研究の指針を得ることができた。

#### 第 4 3 回講演会

講師：皆川邦直 (法政大学)

企画：藤原勝紀、岡田康伸、皆藤 章、河合俊雄

日時：2005 年 2 月 12 日 - 13 日

場所：聖護院御殿荘

テーマ：「精神分析的心理療法から見た心理臨床事例の検討」

概要：心理療法には多種多様な方法論が存在する。それぞれが個性を深めていくことと同時に、お互いを交流させていくことが臨床的にも学問的にも有意義なものとなり得ることは言うまでもない。今回は、法政大学の皆川邦直先生をお招きし、第一日目には自分らしい生き方を模索する中年期女性の事例について、また第二日目にはある男子生徒のスクールカウンセリング事例について、特に精神分析的な心理療法の立場からコメントをいただき、ディスカッションすることで、当該事例についての理解を深めるとともに、新たな視点について模索することを目的とする。

成果：当講演会で提供された 2 事例は、どちらも精神分析を志向して行われたものではなかったが、そうした事例についても、講師の皆川先生による精神分析の視点 つまり治療者とクライアントの転移関係に注目する視点 からの徹底した分析により、治療場面におけるクライアントのイメージ、ファンタジーのうごめきが新鮮な角度から描き出された。精神分析という実践法、および理論に触れるとともに、われわれの目指す心理療法の輪郭を改めて捉えなおす機会となった。また、理論の違いを超えて心理療法に共通する基盤についてもディスカッションを通して共有することが可能となった。参加人数は約 120 名。

#### 第 4 4 回講演会

講師：楠見 孝

企画：伊藤良子

日時：2005 年 2 月 25 日 19:00 - 20:30

場所：京都大学教育学部 2 階 中央装置室

概要：講師の楠見先生より認知心理学における意思決定研究について紹介があり、次に、遺伝カウンセリングにおける意思決定を、不確実状況下におけるそれと位置づけ、言語表現認知、リスク回避傾向の個人差、決定時・決定後の後悔、意思決定における類推の役割といった点から検討がなされた。最後に、今後の研究計画についてお話があり、実際に遺伝カウンセリングにおける心理臨床学的援助に関わっている聴講者から様々な意見が出され、ディスカッションが行われた。参加者は 10 名。

#### 第 4 5 回講演会

講師：S. Robert Young Ph.D. ( South Carolina 大学 )

企画：伊藤良子

日時：2005 年 3 月 2 日 13:30 - 15:30

場所：京都大学文学部東館 3 階 第 3 実習室

テーマ："Genetic Counseling in the United States. -A person's 30years experience-"

概要：日本において遺伝カウンセリングの問題が検討されている中、アメリカにおける遺伝カウンセリングの第一人者であるヤング氏を講師に迎えて、アメリカの遺伝カウンセリングのシステムや訓練のプログラムについて講演をしていただいた。自分自身や家族の遺伝性疾患（あるいはその可能性）に悩む患者に対して、意志決定の援助をする役割として、遺伝カウンセラーが担う範囲と心理臨床的援助が担う範囲の差違について検討し、遺伝カウンセリングの枠組みを認識する貴重な機会となった。参加者は 15 名。

#### 第 4 6 回講演会

講師：Michelle Gedang Ong (University of the Philippines, Diliman)

企画：杉万俊夫

日時：2005 年 3 月 2 日 14 : 00 - 16 : 00

場所：吉田南総合館 A352 室

題目：フィリピンにおける「労働者としての子どもたち」と NGO による援助

概要：フィリピンに数多く存在する子どもの労働者の問題に取り組む NGO の活動に関する研究について報告していただき、国際援助のあり方をも含めて議論する。

成果：約 20 名の参加を得、活発な議論が行われ、上記の目的を達成することができた。

#### 第 4 7 回講演会

講師：永井聖剛(学術振興会特別研究員/McMaster University)、大脇崇史(東京大学)、大澤五住(大阪大学)

企画：齋木 潤

日 時：2005 年 3 月 5 日 13 : 00 - 17 : 00

場 所：京都大学総合校舎 2 1 3 教室

題目：逆相関法(reverse correlation) - 隠された情報を読み解くツールとして

概要：永井聖剛(学術振興会特別研究員/McMaster University)“ Spatiotemporal templates for detecting orientation defined targets”

大脇崇史(東京大学) “ MEG・EEG 計測における逆相関法の適用 ”

大澤五住(大阪大学)

#### 第 4 8 回講演会

講師：Wolfgang Wagner (University of Linz)

題目：バイオテクノロジーの社会的表象

日時：2005年3月18日 14:00 - 16:00

場所：総合人間学部棟 1103室

概要：EU、米国、日本の共同研究プロジェクト「バイオテクノロジーの社会的受容」の成果を社会的表象理論の立場から発表していただき、議論する。

成果：約40名の参加を得、活発な議論が行われ、上記の目的を達成することができた。

#### 第49回講演会

講師：阿久津聡（一橋大学）

題目：ブランドのパーソナリティとコミュニケーション：その構造とダイナミズム

日時：2005年3月24日 15:00 - 17:00

場所：教育学部第2講義室

概要：ブランドは、製品やサービス、組織などを指し示す名称やシンボルである。ブランドは、購買者の意思決定においてヒューリスティクスとして機能するだけでなく、使用者に情緒的・自己表現的な便益を与えるものである。ブランドが機能するうえで、それがコミュニケーションの対象者にとって何を意味するものなのかが重要なカギとなる。対人認知・対人コミュニケーションにおいてパーソナリティが重要な役割を担うように、ブランドのコミュニケーションにおいてもパーソナリティは重要な役割を果たすことが知られている。これまでの研究はブランド・パーソナリティをスタティックに捉え、構造化することに主眼をおいていたが、本研究では、パーソナリティの二面性（桑原，1991 他）を切り口として、そのダイナミズムに主眼を当てたモデル化を試みる。

#### ■ ワークショップ

International Workshop on Object recognition, attention and action

企画：苧阪直行

日時：2004年8月4日～6日

場所：百周年時計台記念館 百周年記念ホール

##### 8月4日

- 10:00 - 11:00 Biederman I. "The Representation of Object Shape in Macaque Inferior Temporal Cortex and Human LOC"
- 11:00 - 12:00 Bülthoff H. "Object Recognition in Man and Machine"
- 12:00 - 13:00 Tjan B. "Invariance, Expertise, and the Dynamic Selection of Representations"
- 13:00 - 14:00 Lunch Time (Restaurant La Tour)
- 14:00 - 15:00 Poster Presentation
- 15:00 - 16:00 Tanaka K. "View-invariant Object Discrimination Depends on Image Familiarity"
- 16:00 - 17:00 Liu Z. "Object Recognition and Perceptual Organization"
- 17:00 - 18:00 Rentschler I. "Contextual Knowledge Shapes Visual 3D Object Representations"
- 18:30 - 21:00 Reception (2nd floor, Conference Room III)

##### 8月6日

- 9:00 - 10:00 Jüttner M. "Strategies of Recognition-by-parts for Visual Object Recognition"
- 10:00 - 11:00 Ando H. "Recognition-by-synthesis: Computation and Neural Mechanisms"
- 11:00 - 12:00 Schwartz S. "Perceptual Learning and Brain Plasticity"
- 12:00 - 13:00 Deco G. "Neurodynamical Competition and Cooperation in Cortical Networks: From Spiking Neurons to Behaviour"
- 13:00 - 14:00 Lunch Time (Restaurant La Tour)
- 14:00 - 15:00 Poster Presentation
- 15:00 - 16:00 Saiki J. "Feature Binding, Object Files, and Visual Working Memory in Dynamic Visual Events"
- 16:00 - 17:00 Vuilleumier P. "How Faces and Emotional Expression Call for Attention"
- 17:00 - 18:00 Davidoff J. "Parallel Routes to Object Recognition"



18:00 - 19:00 Strasburger H. "Role of Spatial Attention in Perceiving Form in Indirect View"

8月6日

9:00 - 10:00 Sogo H. & Osaka N. "Interactions between Shape Perception and Egocentric Localization"

10:00 - 11:00 Tanaka S. "fMRI Studies for Action Imitation: Recognizing Other's Action and Manipulating One's Own Body"

11:00 - 12:00 Miyake Y. "Two Types of Anticipation in Synchronization Tapping"

12:00 - 13:00 General Discussion

13:00 - 14:00 Lunch Time (Restaurant La Tour)

概要と成果：物体認知の心理物理学、脳内表現や計算論について先端的な研究者による国際ワークショップを開催した。多くの発表が心理物理学のアプローチに fMRI を併用した“認知神経心理物理学”の手法をとっており注目された。多くの時間を討議に費やした実りある内容となった。Osaka, Rentschler & Biederman (Eds.) Object recognition, attention & action (Springer Verlag)を準備中(2006年刊行予定)。国外11名、国内13名の発表があった延べ参加者およそ100名で盛会裏に終了した。

## The 2nd International Workshop for Young Psychologists on Evolution and Development of Cognition

企画：藤田和生、板倉昭二

主催：当 COE と東京大学 21世紀 COE プログラム「心とことば 進化認知科学的展開」(代表：長谷川寿一)

共催：SAGA (Support for African / Asian Great Apes) (代表：山極寿一)  
HOPE (Primate Origins of Human Evolution) (代表：松沢哲郎)

日時：2004年11月13日～11月14日

場所：百周年時計台記念館 百周年記念ホール、国際交流ホール、  
11月13日

09:15 - 12:00 HOPE Special Lectures (Chair: Matsuzawa, Tetsuro)

"Evolution of our moral faculty" Hauser, Marc (Harvard University, USA)

"Brain mechanisms of monkey tool-using behaviour" Iriki, Atsushi (Tokyo Medical and Dental College & RIKEN)

"Cognitive Developmental Robotics towards understanding of our brain and mind" Asada, Minoru (Osaka University)

12:00 - 14:00 Lunch and Posters

14:00 - 16:00 Session 1: Social Interaction and Social Intelligence (Chair: Fujita, Kazuo)

Oral-1 "The effect of social facilitation and social dominance on foraging success of budgerigars in an unfamiliar environment" Soma, Masayo (University of Tokyo)

Oral-2 "Social brain and female choice in zebra finches" Ikebuchi, Maki Kanazawa (Institute of Technology)

Oral-3 "Do dogs know what their cooperative human partner does and does not know?" Virányi, Zsófia (Eötvös University, Hungary)

Oral-4 "Inequity averse responses in two nonhuman primates, capuchin monkeys and chimpanzees" Brosnan, Sarah F. (Emory University, USA)

16:00 - 16:20 Break

16:20 - 18:20 Session 2: Views from Action (Chair: Koyasu, Masuo)

Oral-5 "Behavior of infant chimpanzees during the night in the first four months of life: Neonatal smiling and sucking in relation to arousal levels" Mizuno, Yuu (Kyoto University); Takeshita, Hideko (The University of Shiga Prefecture); Matsuzawa, Tetsuro (Kyoto University)

Oral-6 "Infant motor patterns and cortical activation associated with event memory" Watanabe, Hama (Japan Science and Technology Agency, CREST / University of Tokyo)

Oral-7 "Expertise in evaluating actors' performances from the viewpoint of the audience" Brown, (Deirdre Lancaster University, UK); Lamb, Michael (Cambridge University, UK); Pipe, Margaret-Ellen (National Institutes of Child Health and Human Development, USA); Orbach, Yael (National Institutes of Child Health and Human Development,

USA); Lewis, Charlie (Lancaster University, UK)

Oral-8 "Expertise of evaluating other's performance in acting: Role of assuming the viewpoint of audience" Ando, Hanae (Kyoto University)

18:30 - Dinner Party

11月14日

09:00 - 11:30 Session 3: Recognition of Physical Aspects of Environment (Chair: Tanaka, Masayuki)

Oral-9 "Ant-dipping behavior in chimpanzees: To what extent do micro-ecological influences explain variation within and between sites?" Humle, Tatyana (University of Wisconsin, USA); Matsuzawa, Tetsuro (Kyoto University)

Oral-10 "Quantity based discrimination in great apes" Hanus, Daniel (Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology, Germany); Call, Josep (Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology, Germany)

Oral-11 "Perception of shape from shading in chimpanzees and humans" (Imura, Tomoko Kwansei Gakuin University; Tomonaga, Masaki Kyoto University; Yamaguchi, Masami K. Chuo University; Yagi, Akihiro Kwansei Gakuin University)

Oral-12 "Stimulus organization in pigeons' visual perception" Ushitani, Tomokazu (Kyoto University); Fujita, Kazuo (Kyoto University)

Oral-13 "The effects of auditory stimuli on the latency of visually triggered saccades" Kato, Masaharu (Tokyo Women's Medical University); Konishi, Yukuo (Tokyo Women's Medical University)

11:30 - 14:00 Lunch and Posters

14:00 - 15:30 Session 4: Language and Communication (Chair: Endo, Toshihiko)

Oral-14 "The more difficult to articulate, the more difficult to perceive? : Infants' discrimination of /ra/ and /da/ in words." Kajikawa, Sachiyo (Tamagawa University); Sato, Kumiko (Tamagawa University); Kanechiku, Kiyoe (Tamagawa University); Imai, Mutsumi (Keio University); Haryu, Etsuko (University of Tokyo)

Oral-15 "Native language specific development in infant's speech perception and production" Mugitani, Ryoko (NTT Communication Science Laboratories)

Oral-16 "Personality impression formation from thin slices of nonverbal behavior: its bases and consequences." Sakaguchi, Kikue (University of Tokyo); Hasegawa, Toshikazu (University of Tokyo)

15:30 - 15:50 Break

15:50 - 17:50 Session 5: Social Recognition (Chair: Itakura, Shoji)

Oral-17 "Cross-modal social category in monkeys and dogs" Adachi, Ikuma (JSPS and Kyoto University); Fujita, Kazuo (Kyoto University)

Oral-18 "Do humans and baboons use the same information when categorizing human and baboon pictures?" Martin-Malivel, Julie (University of Southern California, USA., and CNRS, France, now at Emory University, USA); Mangini, Michael (University of Southern California, USA); Fagot, Joël (CNRS, France); Biederman, Irving (University of Southern California, USA)

Oral-19 "Development of familiar face recognition: the processing of inner, outer, and isolated features" Zhe, Wang (Zhejiang University of Sciences, China); Lee, Kang (University of California, San Diego, USA); Ge, Liezhong Zhejiang (University of Sciences, China)

Oral-20 "Ground Nesting in the Chimpanzees of the Nimba Mountains, Guinea, West Africa: Environmental or Social?" Koops, Kathelijne (University of Utrecht, The Netherlands); Humle, T. (University of Wisconsin, Madison, USA); Matsuzawa, T. (Kyoto University); Sterck, E. H. M. (University of Utrecht, The Netherlands)

趣旨と成果:国内外より20名の若手研究者を招待し、社会的相互作用と社会的知性、行為を通してみる諸視点、環境の物理的側面の認識、言語とコミュニケーション、社会的認知と題した5つのセッションをおこなうとともに、一般公募による45件のポスター発表がおこなわれた。興味深く、若手ならではの独創性に富むオリジナルワークに基づく活発な討論がおこなわれ、若手のみならず、教員にとっても刺激的な2日間であった。参加人数は約120名。

## 若手研究者のための「感情と認知」ワークショップ

企画：楠見 孝

日時：2005年1月31日 13:00-17:00

場所：芝蘭会館別館 研修室I

1:00 - 1:55 Session1: Conversational agent and Emotion

Kusumi (Kyoto Univ.) "Embodied Conversational Agents in education and mental support"

Cassell (Northwestern Univ.) "Concerns in Evaluating Embodied Conversational Agents"

2:00 - 2:55 Session2: Metaphor & Emotion

Nakamoto (Kyoto Univ. post doctoral researcher) "Conventional metaphors of anger in Japanese"

Taira (Kyoto Univ. Graduate student) "The effect of metaphor on reading processing"

Kovecses (Eotvos Lorand Univ.) "Three levels of metaphor"

3:00 - 3:55 Session3: Story understanding and Emotion

Komeda (Kyoto Univ. Graduate student) "The effect of similarity with respect to protagonists' and readers' emotions on narrative comprehension"

Oatley (Univ. of Toronto) "The experience of emotions while reading short stories: Empirical studies"

4:00 - 4:55 Session4: Mere exposure effect and Emotion

Matsuda (Kyoto Univ. graduate student) "The Levels of Processing Influence the Mere Exposure Effect on Incidental Concept Formation"

Winkielman (UCSD) "When perceiving and thinking is easy on the mind"

概要：国際シンポジウム New Perspectives in Affective Science で来日した認知関係の4人の研究者を招き、4つのセッションを構成した。京大側の院生または若手研究者が話題提供をおこない、それをふまえて、ゲストがコメントをおこなうとともに、関連する話題提供を行い、全体で討論をおこなった。参加した院生は、海外の研究者の前で自分自身の研究発表を行い、あるいは討論に参加することを通じて、各自が国際水準の研究を進めるための大きな刺激を受けた。参加者は約30名。

## ■ シンポジウム

### Kyoto-Michigan Collaboration in Psychology: 2nd Symposium "Self and Society"

日時：2004年4月24日～25日

場所：百周年時計台記念館 国際交流ホール

#### 4月24日

13:00 - 13:10 Opening Remarks by Kazuo Fujita (Kyoto University)

13:10 - 13:50 Eiichi Naito (Kyoto University) "Neural correlates of body schema"

13:50 - 14:30 Patricia Reuter-Lorenz (University of Michigan) "What has brain imaging taught us about aging and working memory?"

14:30 - 15:00 Coffee Break

15:00 - 15:40 Yoshio Sakurai (Kyoto University) "Hebb cell assembly: detection in behavioral neuroscience and brain-machine interface"

15:40 - 16:20 David Meyer (University of Michigan) "Symbolic computational modeling of human multiple-task performance and working memory based on executive-process interactive control"

#### 4月25日

9:00 - 9:40 Shinobu Kitayama (University of Michigan) "A cultural look at New Look: Culturally contingent attention strategies"

9:40 - 10:20 Motoki Watabe (Kyoto University) "Building trust -institutional approach-"

10:20 - 10:40 Coffee Break

10:40 - 11:20 Richard Gonzalez (University of Michigan) "Challenges to Standard Models in Judgment and Decision Making"

- 11:20 - 12:00 Masaki Tomonaga (Kyoto University) "Chimpanzee social cognition in early life"
- 12:00 - 13:30 Lunch Break
- 13:30 - 14:10 Masuo Koyasu (Kyoto University) "Young children's development of understanding other's mind."
- 14:10 - 15:50 Sheryl L. Olson (University of Michigan) "Development of psychopathology in early childhood: A transactional model"
- 14:50 - 15:10 Coffee Break
- 15:10 - 15:50 Yoshihiro Kadono (Kyoto University) "Characteristic of schizophrenic drawings to remission -from the point of view of the landscape montage technique-"
- 15:50 - 16:30 Tomoko Kuwabara (Kyoto University) "Application of clinical psychology in present-day Japanese society"
- 16:30 - 16:40 Closing Remarks by Richard Gonzalez (University of Michigan)

概要：2003年12月6、7日にミシガン大学心理学部で開催された第1回京都・ミシガン国際交流シンポジウム（京都大学国際シンポジウム）の成功を受けて、今回は京都で第2回シンポジウムが開催された。ミシガン大学心理学部から、学部長 Richard Gonzalez 教授をはじめ、Patricia Reuter-Lorenz 教授、David Meyer 教授、Sheryl L. Olson 教授、そして Shinobu Kitayama 教授の5名が参加し、京都大学心理学連合 COE のメンバー7名とともに、『自己と社会（Self and Society）』というテーマで開催された。第1日目は主として神経科学からみた自己をテーマとした講演が、第2日目は自己と社会の相互作用、自己の発達、ならびに自己の精神病理・心理をテーマとした講演が行われ、参加者との間で活発な意見交換が行われた。

成果：2003年12月5日に京都大学とミシガン大学との間で学術交流に関する覚書が交わされた。この覚書に基づき、どのような学術交流を実際に実施していくかの話し合いが、シンポジウムと並行して、ミシガン大学からの参加者と心理学連合 COE の総務委員との間で行われ、学生の交換や教員の交換、共同研究プロジェクトの計画などの具体案が検討された。今回の来日で、ミシガン側の教員と京都大学の教員との間の意思疎通がさらに容易になったと思われる。話し合いの成果は、ミシガン大学教員との共同研究プロジェクトの開始として早速現れている。参加人数はのべ150名。

## シンポジウム「医療の場における心理臨床」

企画：伊藤良子

日時：2003年5月8日 17:00-19:00

場所：京都市リサーチパーク東地区1号館・4Fサイエンスホール

司会：伊藤 良子（京都大学大学院教育学研究科）

吉岡 章（奈良県立医科大学小児科）

シンポジスト：

橋本 洋子（聖マリアンナ医科大学横浜市西部病院周産期センター）

「周産期の心理臨床 ～重篤な疾患をもつ赤ちゃんをめぐる～」

黒川 嘉子（京都大学大学院教育学研究科）

「小児科で出会う遺伝性疾患の子どもへのプレイセラピー」

安藤美華代（東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科）

「糖尿病医療における心理的インターベンション」

矢永由里子（国立病院九州医療センター 感染症対策室）

「HIV 感染症における心理臨床の関わり；チーム医療の視点より」

概要：遺伝カウンセリングの現場における、患者（クライアント）への心理臨床的援助の必要性については久しく認知されているが、具体的に、心理スタッフがどのような形で関わり、他職種の方々と連携していくかについては、いまだ模索段階にある。しかし、医療分野ではさまざまな分野で心理スタッフが活動しており、周産期、小児期、成人期等で活躍している臨床心理士をシンポジストとして招きした。事例を通してそれぞれの活

動を提示していただき、各領域ならではの特徴や医療における心理臨床が抱える共通問題について検討することになった。そこから、遺伝カウンセリングにおいては、どのような関わりが望ましいか、認識を深めることになった。参加者は約 300 名。  
(日本遺伝カウンセリング学会第 28 回学術集会の一環として開催された)

## 国際シンポジウム 「心理療法の役割と目的 The Role and Aim of Psychotherapy」

企画：岡田康伸

日時：2004 年 8 月 14 日 13:00-17:00

場所：百周年時計台記念館 百周年記念ホール

シンポジスト：河合 隼雄（文化庁長官）

Robert Bosnak（個人開業心理療法家）

Sachiko Reece（ケドレン精神衛生センター）

Bruno Rhyner（個人開業心理療法家）

通訳：名取琢自（京都文教大学）

司会：岡田康伸

概要：4 人のシンポジストは、それぞれに心理療法におけるイメージの働きを重視し、イメージによる心理療法を実施している点で共通している。今回は、今一度「心理療法とは何か」の基本に立ち返り、これを考察するなかで、イメージの働きとは何か、またイメージとは何かについて議論を深めたい。

それぞれのシンポジストは日ごろの心理療法の実践では、夢や箱庭療法などの臨床イメージを大切にしており、実践を通して考える「心理療法の役割と目的」について話題提供していただく。

ボスナック氏は、エイズ患者のドリームワークや個人セラピーでの経験を基に、ブルーノ氏には星と波テストなど心理テストを活用した心理療法実践を基に、またリース滝氏には箱庭療法を中心に、外国での心理療法と日本の心理療法の両者を知る立場から、それぞれ本テーマについて話題提供していただく。さらに、河合隼雄氏には、文化という視点も含めた心理療法の役割と目的について提言していただく。

なお、当シンポジウムは一般公開で行い、3 時間をシンポジストの話題提供と相互のディスカッションにあて、残りの 1 時間でフロアとの交流を深めるため質疑応答にあてる。

成果：近年、心理療法に対する社会的ニーズが高まる中で、心理療法を行う施設数、臨床心理士を養成する大学院数の増加を見ても、その量的拡大は著しいものがあり、心理療法が扱う対象の範囲も急速な広がりを見せている。こうした中で、その質的充実の面で遅れをとらないことが、極めて重要な課題と言える。本シンポジウムでは、それぞれ膨大な臨床経験を持ち国際的に心理療法を牽引してきたそれぞれのシンポジストから、心理療法の原点に立ち返ってその役割と目的を再度見つめ直すという観点での話題提供があり、心理療法の本質についての活気ある議論が行われた。

また、心理療法に関するシンポジウムは、個の心に深く寄り添うという営みの性質上、専門家みのクローズドで行なわざるを得ないことが多いが、本シンポジウムは敢えて一般公開で行い、広く一般の方々にも心理療法の役割と目的について知っていただき、また質疑応答の場で、意義深い意見交換が行うことができた点で非常に実り多いシンポジウムであった。参加人数は約 100 名。

## 国際ワーキングメモリ学会

企画：芋阪直行

日時：2004 年 8 月 17 日 - 20 日

場所：京都国際会議場

## 8月17日

- 9:00 Opening Remark (Naoyuki Osaka)  
Chairperson: Graham J. Hitch & Satoru Saito
- 9:15 Stephan Lewandowsky "Encoding time and short-term serial recall"
- 9:40 Mike Page / Dennis Norris "A structural account of the relationship between immediate serial recall, the Hebb effect, and the learning of phonological word-forms"
- 10:05 Marie Poirier "Is there a vocal similarity effect on serial recall over the short-term?"
- 10:30 Coffee Break
- 10:55 Gerry Tehan "Word length and phonological similarity effects in immediate, delayed and complex backward span tasks"
- 11:20 Satoru Saito "The independence of phonological and visual similarity in serial ordered recall: Evidence from Kanji"
- 11:45 Graham J. "Hitch Immediate memory for sequences in the visual domain"
- 12:10 Discussion
- 12:40 Lunch Time  
Chairperson: Meredyth Daneman & Akira Miyake
- 13:50 David Pearson "Mental image manipulation and transformational complexity in visuo-spatial working memory"
- 14:15 Gerry Quinn "Interference effects and the structure of visual working memory"
- 14:40 Edward Vogel "Neural activity predicts individual differences in visual working memory capacity"
- 15:05 Naoyuki Osaka "Individual differences in working memory under "theory of mind" task: An fMRI study"
- 15:30 Tea Time
- 15:55 Chris Jarrold "The effects of storage load on processing efficiency in working memory: Evidence from verbal and visuo-spatial complex span tasks"
- 16:20 Pierre Barrouillet / Valérie Camos "The Time-Based Resource-Sharing model"
- 16:45 Akira Miyake "Individual differences in working memory: What do working memory span test really measure?"
- 17:10 Meredyth Daneman / Brenda Hannon "What do working memory span tasks like reading span really measure?"
- 17:35 Discussion
- 18:00 Opening Reception (Room "Swan", 1F)

## 8月18日

- Chairperson: Nelson Cowan & Michael Kane
- 9:00 Michael Kane "Working-memory capacity and executive control of task-set switching"
- 9:25 André Vandierendonck "Response selection as an aspect of executive control"
- 9:50 Graeme S. Halford "Human information processing capacity is defined by number of related variables"
- 10:15 Paul Verhaeghen "A working-memory workout: How to expand the focus of serial attention from one to four items, in ten hours or less"
- 10:40 Coffee Break
- 11:05 Nelson Cowan "Limits of attention in working-memory storage"
- 11:30 Klaus Oberauer "Bindings in working memory and outside?"
- 11:55 Alan Baddeley "Exploring the episodic buffer"
- 12:20 Discussion
- 12:50 Lunch Time
- 14:00 Optional Tour (14:00 - 18:00) or Free Poster Discussion (Room B1 & B2; 14:00 - 17:00)

## 8月19日

- Chairperson: Mark D'Esposito & Shintaro Funahashi
- 9:00 "Shintaro Funahashi Working memory: How do prefrontal neurons store and process the information"
- 9:25 Toshiyuki Sawaguchi "The role of catecholamines on working memory processes in the primate prefrontal cortex"
- 9:50 Masataka Watanabe "Is there "affective" working memory?"
- 10:15 Robert T. "Knight Prefrontal cortex and working memory: Effects of neurological damage"
- 10:40 Coffee Break
- 11:05 Motoichiro Kato "Verbal working memory and dynamic aphasia"

11:30 Bradley Postle "Prefrontal Cortex Contributions to Working Memory Functions"  
 11:55 Mark D'Esposito "Towards understanding the role of the prefrontal cortex in cognitive control"  
 12:20 Discussion  
 12:50 Lunch Time  
 Chairperson: Susan M. Courtney & Mariko Osaka  
 14:00 Mariko Osaka "Neural basis of focusing in executive function of working memory: Comparing focused- and non-focused-RST"  
 14:25 Lars Nyberg "Sustained and transient brain activity during tests of working memory and episodic memory"  
 14:50 Fabienne Collette "Transient and sustained cerebral responses during an updating task"  
 15:15 Tea Time  
 15:40 Susan M. "Courtney Working memory control processes affected by changing or repeating task demands"  
 16:05 Michael Petrides "Functional organization of the primate prefrontal cortex for memory"  
 16:30 Discussion  
 17:00 Poster Session (Room B1 & B2)  
 概要：第2回国際ワーキングメモリ学会を開催した。日本学術振興会、京大教育研究振興財団からも補助を受けた。ワーキングメモリについてさまざまな側面から最新の研究発表と討議がなされた。今回は特に behavioral & neural correlates の視点からワーキングメモリを再検討した。口頭発表 38件、ポスター発表 90件、参加者194名(うち招待講演(国内7名 国外31名)があり、盛会裏に終了した。

## シンポジウム 「病の意味(2)」

企画：山中康裕  
 日時：2004年12月19日 13:00 - 17:00  
 場所：百周年時計台記念館 国際交流ホール  
 講演者：Peter Widmer (京都大学客員教授・ラカン派分析家)「Disease as non-articulated language」  
 野間俊一(京都大学医学部精神科神経科)「エスの志向 - グロデック心身論の射程」  
 岸本寛史(富山大学保健管理センター)「意味とナラティブ」  
 通訳：北口雄一(北口分析プラクシス)  
 司会：山中康裕  
 概要と成果：医学の革新的な進歩も含め、社会の変化に伴い、病に対する捉え方に大きな変化が生じている。人間にとって、社会にとって、病はどんな意味をもっているのだろうか。このような問いに対して、昨年度開催したシンポジウム「病の意味(1)」に引き続き、病のもつさまざまな次元の意味を、ラカン派分析家の視点、精神科医の視点、内科医の視点から多角的に検討した。多層的な心や身体の在り方、病が表現していること、病の象徴性などを切り口として、人間の主体を見つめ直す機会となった。参加者は約50名。

## 国際シンポジウム "New Perspectives in Affective Science"

日時：1月28日-30日  
 場所：百周年時計台記念館  
 企画：吉川左紀子  
1月28日  
 09:30- Opening Remarks Kazuo Fujita (Kyoto University, Japan)  
 09:45-12:45 Session 1: Social Interaction and Culture  
 Session Chair: Motoki Watabe (Kyoto University, Japan)  
 Beatrice DeGelder (University of Tilburg, Netherlands) "Face recognition in context"  
 Sakiko Yoshikawa (Kyoto University, Japan) "Social communication via facial

expressions”

Daniel M.T. Fessler (University of California Los Angeles, USA) “Shame in Two Cultures”

Ross Buck (University of Connecticut, USA) “A Developmental-Interactionist Theory of Biological and Higher Level Emotions: A Cross-National Comparison of America and Japan”

Discussant: Shinobu Kitayama (University of Michigan, USA)

12:45-14:30 Poster Session (Lunch Time)

14:30-17:30 Session 2: Pathology and Health

Session Chair: Tomoko Kuwabara (Kyoto University, Japan)

Toshiya Murai (Kyoto University, Japan) “Emotional Cognition and Decision Making in Neuropsychiatric Disorders”

Randolph Nesse (University of Michigan, USA) “How an evolutionary understanding of mood can help to explain cross cultural differences in depression”

Peter Widmer (Psychotherapist, Switzerland) “Anxiety — a challenge for the research on causality”

Toshio Kawai (Kyoto University, Japan) “The experience of the “numinous” today: from the novels of Haruki Murakami”

Discussant: Carl Becker (Kyoto University, Japan)

### 1月29日

09:30-12:30 Session 3: Neural Systems

Session Chair: Yoshio Sakurai (Kyoto University, Japan)

Ryoi Tamura (Toyama Medical and Pharmaceutical University Japan) “The effects of dopamine receptor subtype knockout on goal-directed behavior and reward-anticipatory neural responses in the nucleus accumbens of mice”

Edmund Rolls (University of Oxford, UK) “Neurophysiology, neuroimaging and neuropsychology of the orbitofrontal cortex”

Antoine Bechara (University of Iowa, USA) “Human emotions in decision-making: Useful or disruptive role?”

Piotr Winkielman (University of California San Diego, USA) “Preferences with and without inferences: The interplay of feelings and beliefs in judgment and behavior”

Discussant: Shintaro Funahashi (Kyoto University, Japan)

12:30-14:30 Poster Session (Lunch Time)

14:30-17:30 Session 4: Cognition and Language

Session Chair: Toshihiko Endo (Kyoto University, Japan)

Keith Oatley (University of Toronto, Canada) “How language affects emotions: Effects of narrative, metaphor, and metonymy”

Zoltán Kövecses (Eötvös Loránd University, Hungary) “Metaphor and emotion”

Takashi Kusumi (Kyoto University, Japan) “Emotion metaphors: Effects of image schemas, experiences and norms”

Justine Cassell (Northwestern University, USA) “Establishing Rapport with Virtual Peers”

Discussant: Yuichiro Anzai (Keio-Gijuku University, Japan)

18:30- Banquet

### 1月30日

9:30-12:30 Session 5: Evolution and Development

Session Chair: Masaki Tomonaga (Kyoto University, Japan)

Kim Bard (University of Portsmouth, UK) “Comparative developmental perspectives on emotion”

Shunya Sogon (Osaka-Gakuin University, Japan) “Culturally specific affective-cognitive structures of human emotions”

Yukari Kubo (Toyo University, Japan) “Preschool children’s understanding of multiple emotions”

Carolyn Saarni (Sonoma State University, USA) “Promoting Emotional Competence in Children and Youth”

Discussant: Kazuo Fujita (Kyoto University, Japan)

12:30- Closing Remarks Sakiko Yoshikawa (Kyoto University, Japan)

概要と成果：2005年1月28日～30日の3日間、国際シンポジウム「New perspectives in



affective science」を開催した。感情は認知や行動を方向づけ、人と人の心を結びつける鍵となる重要な心の働きである。最近、感情のはたらきについての関心が急速に高まり、「感情科学 ( affective science ) 」として学際研究がさかんになっている。このシンポジウムでは、神経システム、認知と言語、進化と発達、社会と文化、病理と健康という5つのセッションを設け、多様な心の側面に関わる感情を取り上げた。各セッションでは、異なる手法を用いて先端の感情研究を行っている国外、国内の研究者が各4名ずつ、16名が研究報告を行い、ディスカッサントがコメントした。さらに、活発な質疑応答によって理解を深め、新しい感情研究への指針を探った。シンポジウム期間中、ポスターセッションも設けられ、40件の発表があった。参加者は160名であった。

## 日本質的心理学会第1回大会

日時：9月11日

場所：京都大学文学部

企画：山田洋子

8:20～ 受付開始

9:10～12:10 大会シンポジウム

「質的研究の方法論 KJ法とグラウンデッド・セオリー」

川喜田二郎・水野節夫・戈木クレイグヒル滋子・やまだようこ・能智正博

12:20～12:50 総会

12:50～13:20 休憩

13:20～15:20 シンポジウム1

「他者との出会い 教育のフィールド 出会いを記録する」

秋田喜代美・鯨岡峻・佐藤公治・箕浦康子

シンポジウム2

「質的研究はいかに『科学的』たりえるか? 医療・看護領域の研究に学ぶ」

齊藤清二・西村ユミ・香川秀太・川野健治・松嶋秀明・西條剛央・荒川歩

シンポジウム3

「記念日と記念碑」

寺田匡宏・今井信雄・渥美公秀・矢守克也

15:40～17:10 対談

「倫理実践としてのフィールド研究」

櫻田美雄・杉万俊夫・抱井尚子

ワークショップ

「福祉と医療における質的研究の生成プロセス 若手研究者が語るデータ・プレゼンテーションの工夫」

田垣正晋・山崎浩司・無藤隆

講演と対話

「工学と質的心理学の弁証法 質的研究にかかる期待と不安、そして展望」

塩瀬隆之・佐伯胖・大谷尚

17:30～19:00 招待講演

“Transformations and flexible forms: Where qualitative psychology begins”

Valsiner, J・サトウタツヤ・やまだようこ・當眞千賀子

19:20～(20:40) 懇親会

成果：新しい質的心理学会の立ち上げに、アメリカ・クラーク大学から、ヴァルシナー教授を招いて、招待講演をお願いした。また、質的心理学会の方法論について第一人者のシンポジストにより、KJ法とグラウンデッド・セオリーについて日本で始めて議論するシンポジウムを開催した。参加者は160人を越し、部屋に入りきれない人々は外でVTRを見るといふ熱気にあふれたシンポと講演となり、大盛況であった。

## 日本認知心理学会「パターン認識と知覚モデル」分科会

「物体・テクスチャ・顔 - パターン認識と知覚研究の最前線 - 」

日時：10月9日 13:00～

場所：百周年時計台記念館 会議室

企画：齋木 潤

主催：日本認知科学会 「パターン認識と知覚モデル」研究分科会

安藤広志 (ATR)「視覚生成イメージに基づく3次元物体認識 - 計算論と神経処理メカニズム -」

本吉 勇 (NTTコミュニケーション科学基礎研究所)「ヒューマン・テクスチャ・ビジョン -知覚的体制化の基礎過程-」

鈴木敦命 (東京大学)「視覚から感情へ：顔表情認識の統合モデルに向けて」

企画趣旨と成果：物体、テクスチャ、顔の認知について、実験的なアプローチとモデル的なアプローチの両面から研究を進めている先生方にご自身のご研究を含めた最先端の研究動向についてご講演いただいた。会場には約40名の参加者が集まり、講演後には活発な議論が交わされた。

## 公開講座 『ラカンとデカルト ～ラカンの精神分析はいかにデカルト的か？』

日時：10月17日

場所：京都大学百周年時計台記念館 国際交流ホール

企画：山中康裕

講師：ピーター・ヴィトマー（京都大学客員教授）

河合 俊雄（京都大学助教授）

司会：角野 善宏（京都大学助教授）

概要と成果：世界的に著名なラカン派分析家の Peter Widmer 氏から、ラカンの精神分析について、デカルト哲学との対比という興味深い視点から講演していただいた。難解と言われるラカンの精神分析を、長年に渡る豊富な臨床経験や研究に裏打ちされた立場からお話いただき、また、ユング派分析家である河合俊雄氏による通訳と解説を通して、フロア全体で、人間主体、こころの本質について深く追求することができた。参加者からも難しいながらも人間存在に関わるテーマを考える充実した時間となったという感想が挙がった。参加者は約50名。

## 第2回日本ワーキングメモリ学会大会

日時：3月5日、6日

企画：苧阪直行・船橋新太郎・齊藤智

場所：京都大学時計台百周年記念館 百周年記念ホール

概要：シンポジウム「高齢者の記憶障害とワーキングメモリ」および「ワーキングメモリの新しい展開」を開催。高齢者痴呆とワーキングメモリのかかわりについて神経内科、心理学、認知神経科学からの最新のアプローチについて講演が行われる。同時にワーキングメモリの新しい展開についてもシンポを行う。第2回日本ワーキングメモリ学会と共催プログラムである。

### 3月5日

13:00-16:00 シンポジウム「ワーキングメモリの新しい展開」

加藤元一郎(慶應義塾大学)「変性痴呆におけるワーキングメモリの異常について」

宮谷真人(広島大学)「ワーキングメモリへの干渉がもたらすERP変化の個人間のばらつきについて」

関口貴裕(東京学芸大学)「説明文理解における状況モデルとワーキングメモリの関係」

近藤武夫(広島大学)「ワーキングメモリの個人差研究とその応用可能性」

16:00-16:30 休憩

16:30-17:50 一般発表

土田幸男(北海道大学大学院)「ワーキングメモリ容量の個人差に関わる認知機能の探索」

林海 香 (慶應義塾大学大学院)・五十嵐一枝 (白百合女子大学)・加藤元一郎・鹿島晴雄 (慶應義塾大学)「アスペルガー症候群における流動性知能」  
渡辺 慶・船橋新太郎 (京都大学大学院)「眼球運動方向の決定に關与する前頭連合野神経機構」  
大塚結喜・松田裕明・苧阪直行 (京都大学大学院)「暗算の遂行におけるワーキングメモリのはたらき」

18:00- 懇親会

3月6日

10:30-11:50 一般発表

金田みずき・苧阪直行 (京都大学大学院)「意味情報の短期的保持過程における実行系機能の役割」

板垣文彦 (亜細亜大学)「乱数生成課題における知的要因」

山下由紀恵 (島根県立島根女子短期大学)「乳児期注視反応時間分布による発達予測効果の検証」

池田尊司・苧阪直行 (京都大学大学院)「色のカテゴリに対するワーキングメモリの関与」

12:00-13:00 昼食

13:00-16:00 シンポジウム「高齢者の記憶障害とワーキングメモリ」

福山秀直 (京都大学)「高齢者の痴呆とワーキングメモリ」

苧阪直行 (京都大学)「高齢者のワーキングメモリデザイン」

苧阪満里子 (大阪外国語大学)「高齢者のワーキングメモリを測る-高齢者用 RST の紹介-」

室橋春光 (北海道大学)「ワーキングメモリと発達障害 個人差の視点から」

16:00-16:30 休憩

16:30-17:50 一般発表

福島 航・河村 暁 (筑波大学)・佐藤晋治 (大分大学)・室谷直子・前川久男 (筑波大学)「LD 児における音韻ループの機能と漢字の読み習得の関連性について」

宮谷真人 (広島大学)「視空間的ワーキングメモリのはたらきを反映する事象関連電位」

後藤多可志 (北里大学)「小児の視覚性記憶の発達について」

柴 玲子 (北里大学)「小児の聴覚性記憶の発達について」

成果：シンポジウムは「高齢者の記憶障害とワーキングメモリ」および「ワーキングメモリの新しい展開」の2件、一般発表12件であった。「新しい展開」ではワーキングメモリの個人差をどのようにとらえるか、「高齢者」では加齢によるワーキングメモリ機能の障害の評価と改善について論議された。のべ参加者140名であった。取材があり、高齢者シンポの概要は3月11日付け朝日新聞夕刊に特集記事として掲載された。

